

ティリマイン 町境を越えるガーリー



ティリマインは中央駅から北西（左回り、外回り）へ11番目の駅で、通勤時には工員などの乗り降りのにぎわうが、日中はひっそりとしている。植民地時代も独立直後も、開発の手はこのあたりまで及ばなかったようで、公的な施設はほとんど見られない。駅の南には小屋掛けの市場が線路に沿って延び、日本の中世の絵巻物にでも出てきそうな粗末な佇まいが、黒くにごった湿地の手前まで続いている。こういう劣等地は、ある日突然やすく買い取られて、病院やホテルなどが建ったりするものだが、ここではミヤカンター歩道橋のすぐ脇にインターナショナル・スクールが建っている。

「ティリ」(Thiri) は梵語の「シュリ」(スリランカの「スリ」) のビルマ語訛りで「吉祥、めでたい」を意味する。「マイン」(Myaing) は「多い」の意。仮に訳せば「多福」とでもなるか。ヤンゴンの町でこうしためでたい名前がつく地区は、恵まれない人達が住んでいることが多い。せめて名前だけでも立派にして福を呼び込もうという住民の願いなのか、それとも、住民がやけにならぬよう為政者が考え出した安上がりの知恵なのか。

駅のすぐ北を東西に走るティリマイン通りも、低湿地をつらぬく盛り土をコンクリートで固めただけの道だが、ここは多少とも「福」が呼びこまれたのか、道の両側に並ぶ商店は華やかで、サイカーのベルがひっきりなしに鳴っている。灯ともし頃になれば炊飯の煙

の中で子供が遊び、大人が涼む。よそ者にも警戒をしない、おだやかな町である。

ミヤカンター通りを西へ約1キロメートル進むと、青果市場「新ティリ・ミンガラー市場」がある。「ミンガラー」は福をもたらす火星の意味で、旧ティリ・ミンガラー市場はチミンダイン町の南西端、カンナー道路に面していたが、そこが輸入自動車の倉庫に転用されたため、青果市場はこちらに移った。広い敷地に店舗が配置され、開梱、秤量、梱包などの作業が、整然と効率的に進んでいる。あまり整然としすぎて、市場の混沌が好きなき者にはちょっと物足りない。

市営「中央市場」が町営の公設市場より格上である証拠に、集まってくる白いナンバープレートのガーリーの登録地が多彩である。地元ライン町だけでなく、カマユッ、マヤンゴン、インセイン、アロンなど各地の小売業者の仕入品の輸送を請け負っているのだろう。

町でふつうに見かける「サイカー」は「サイドカー」が訛ったもので、自転車の横（一般に右側）に座席がついている。座席は背中合わせに前向きと後ろ向きがあり、後部座席に荷物を積み込むこともあるが、積める量は知れている。町（タウンシップ）ごとにプレートの色が異なり、ビルマ語3文字で町名が略記されている。たとえばライン町（Hlaing Myo Ne）なら La Ma Na となる。町には要所ごとに「サイカー・ゲート」が設けられ、登録車両数が5台単位で記されている。市場の周囲など交通量の多いところでは25台、30台登録というところもある。

「ガーリー」（Gali）はヒンディー語の Gari（車）が訛ったもので、自転車の右側に平らな荷台がつき、半円形に削られた先端には鉄の籠（たが）がかぶさっている。ときに荷主らしいおばさんが前に座っていることもあるが、本来荷物専用の設計である。荷台の後ろにある荷物のすべり出し防止用の鉄格子を倒せば、長い荷物が寝かせられる。

荷台は縦長のチークの板を横に4枚並べたもので、一枚ごとに深々と車のナンバーが彫り込まれているのは、盗めば転売できるほど高価なものだからだろう。その陰刻が浅くなるまで使い込まれた荷台を見ると、ご苦労さんと言いたくなる。

英語が訛った「サイカー」の人間工学と、ヒンディー語が訛った「ガーリー」の鈍重な単純さ。どちらも庶民の知恵のあらわれである。日本でも1960年ごろまで「運搬車」と呼ばれる特別頑丈につくられた自転車があった。がっちりしたスタンドを立て、荷台に積んだ氷をのこぎりで切り分け、各戸の冷蔵庫に配達する、ランニングシャツに短パン、前掛け姿のおっさんの仕事振りを、飽かず眺めていた少年時代を思い出す。

（了）